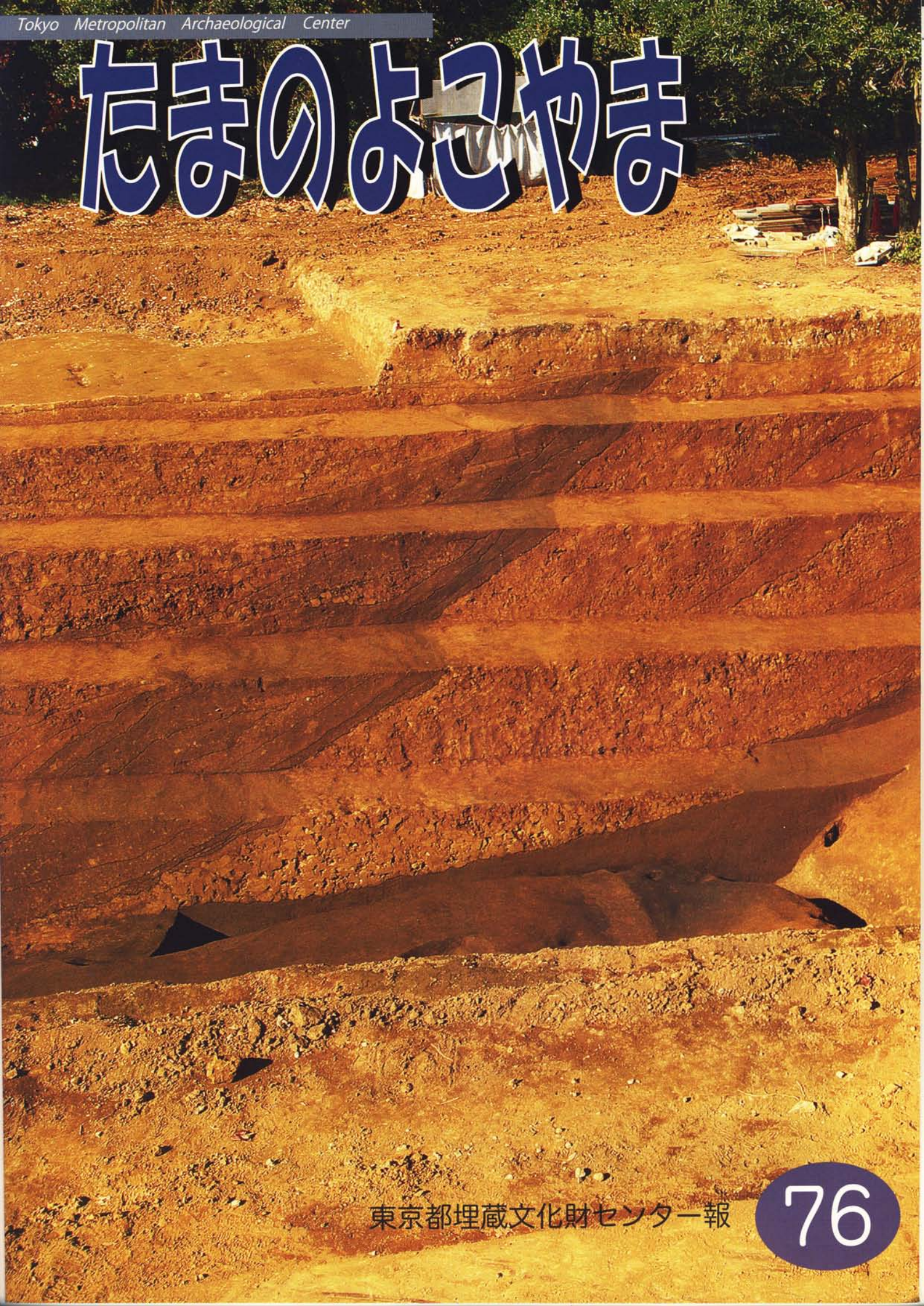
Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま



東京都埋蔵文化財センター報

76

遺跡だより 87

港区愛宕下（港区No. 149）遺跡

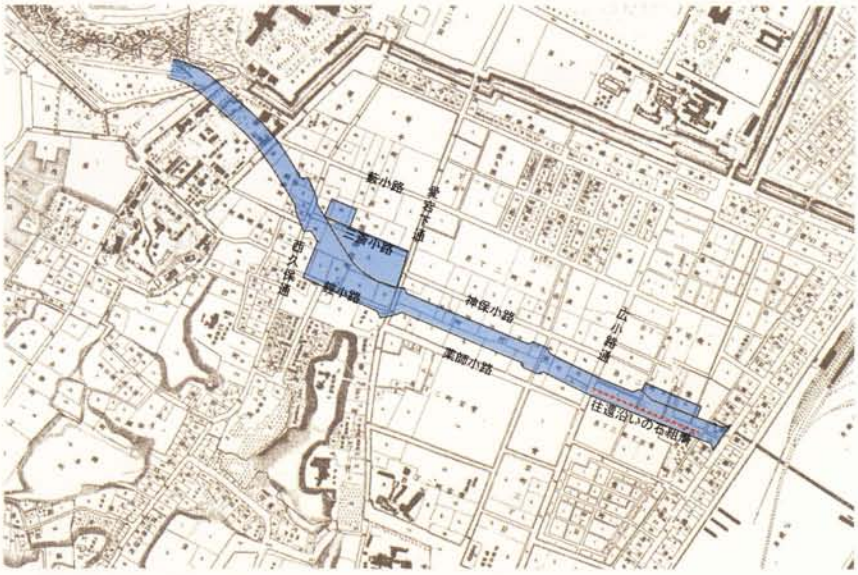
所 在 地：港区新橋四丁目他
調査期間：平成16年1月～現在継続中
調査対象面積：29,000㎡

本調査地は、現行の東京都港区新橋四丁目・同西新橋二丁目・同虎ノ門一丁目に所在し、第一京浜（国道15号線）から桜田通り（国道1号線）までの区間で、直線距離にして約980 m、環状第二号線工区幅の約40 mの範囲です。『御府内沿革圖書』に照会すると、東から概ね、東海道筋の源助町から広小路通（愛宕下大名小路：現赤レンガ通り）に至る区画、広小路通を経て神保小路と薬師小路に挟まれる区画、愛宕下通（現愛宕通り）を経て三斎小路を含む藪小路と鎧小路に挟まれる区画で西久保通（現桜田通り）に至る範囲に該当します。

当該地域は、武蔵野台地末端の丘陵である愛宕山（標高約26 m）の東側に広がる低地にあたり、江戸時代は概ね「愛宕下」と呼称された地域です。この低地は、「日本橋台地」（本郷台地が浸食され形成された埋没地形）西側に位置する「丸の内谷」と呼称される埋没谷の沖積地の一部として形成されたようです。本調査地の現表標高値は第一京浜付近で2.7 m、日比谷通りまでは概ね比高差の少ない平坦面を呈し、日比谷通り以西は愛宕山へ向け緩い上り勾配となります。

天正十八年（1590）徳川家康の江戸入府当時は、上記「日本橋台地」を基盤とした「前島」と呼ばれた砂州と、埋没谷を母体とした「日比谷入江」と呼ばれる入り江が海手に広がる景観を呈していたようで、家康入府以降江戸城の築城とともに都市江戸の整備が進められます。文禄元年（1592）江戸城西の丸造営を契機とする日比谷入江の埋め立てをはじめとし、慶長八年（1603）には神田山の切り崩しによる沿岸域の埋め立てが行われます。この一連の沿岸域の造成過程において、愛宕山東側低地の市街地も整備されたと判断され、『武州豊嶋郡江戸庄図』（寛永九年当時の姿）に示される「愛宕下」は、東海道筋に町屋が配される以外、大名屋敷・旗本屋敷などの武家屋敷で占められます。以後の江戸図からも屋敷替えの変遷が窺えるものの、明治維新まで武家地として利用されました。東京府が制定され当該地区の行政区画は、明治七年（1874）の大区小区制により「第二大区二小区」に属し、さらに明治十一年（1878）郡区町村編成法により「芝区」に属します。

調査は、平成十六年（2004）1月より開始し、現在も継続しています。平成二十年度調査では、往還に沿う排水用の大規模な石組溝、武家屋敷を区画する石垣、屋敷内の諸施設（建物礎石、池跡、上水施設／木樋・竹樋・桶、排水施設／石組溝・木組溝、廃棄土坑などを確認しています。　（石﨑 俊哉）



事業域と愛宕下遺跡（港区No. 149）調査対象範囲（縮尺不同）
原図　内務省地理局　明治二十年「東京実測図」
東京都港区立三田図書館 1976『近代沿革図集 新橋・芝公園・芝大門・浜松町・海岸』より作成

往還沿いの石組溝

遺跡だより 88

文京区春日二丁目西遺跡

所 在 地：文京区春日二丁目８
調査期間：平成 20 年７月～12 月
調査面積：1,958 ㎡

春日二丁目西遺跡は、文京区春日二丁目（旧小石川区小日向第六天町）、地下鉄丸ノ内線後楽園駅と茗荷谷駅のほぼ中間地点の南側に位置します。遺跡は、武蔵野台地東端部の小石川台地から続く、小日向台地の南側斜面部で、茗荷谷の左岸に位置します。台地斜面下の巻石通りには神田上水が、さらに南側には神田川が流れています。

本遺跡は、国際仏教学大学院大学の建設工事に伴ない発見された遺跡です。

この周辺は、戦国大名・後北条氏の時代には、「小日向」や「小石川」の地名がみられます。江戸時代に入り、寛永 19 ～ 20(1642 ～ 43) 年頃には越前丸岡藩本多家の屋敷地となっていたことが確認されます。以後、大名屋敷地として推移し、若狭小浜藩酒井家、武蔵川越・甲斐府中藩柳沢家と替わり、再び酒井家の屋敷地となります。正徳３(1713) 年に屋敷地の中央付近に新たに道（新坂・現在の今井坂）が設けられ、本遺跡を含む範囲は、翌正徳４年から豊後府内藩松平家、相模萩野山中藩大久保家と替わり、幕末の文久２(1862) 年からは信濃飯山藩本多家の屋敷地となります。そして明治 34(1901) 年からは、最後の将軍徳川慶喜が亡くなる大正２(1913) 年まで過ごした場所として知られています。

発掘調査の結果、旧石器時代の遺物集中地点、縄文時代の炉穴や集石・陥穴土坑、弥生時代の土器を伴う土坑、中世の溝や土塁状の盛り土、江戸時代初期に谷を埋めた跡、江戸時代の屋敷に関わる建物跡や井戸・地下室などの遺構や遺物が見つかりました。

江戸時代初期の谷を埋めた跡は、確認できた深さが現地表面から 6m 以上あり、黒土とロームで埋められていました。この谷は西側の茗荷谷から入り込む谷で、屋敷地を造成するために埋めたものです。このような谷を埋めて屋敷地を造成する土木事業が、日比谷入江の埋め立や江戸城外濠などの大規模な土木事業だけでなく、江戸周辺部の屋敷地でも江戸時代の早い時期から行われていたことが、今回の調査により明らかになりました。

中世の溝は、この埋められていた谷の下から見つかりました。溝は斜面に並行するもの、直交するもの、溝の片側に土塁状の盛り土をもつものが見つかっています。これらの溝の時期や機能は現在のところ明確ではありませんが、調査範囲の周辺に広がることが想定されます。（小林 裕）

江戸時代初期に谷を埋めた跡（右側斜面部分が谷・階段状部分が谷を埋めた黒土とローム）と中世の溝

遺跡だより 89

渋谷区千駄ヶ谷大谷戸遺跡

所 在 地：渋谷区千駄ヶ谷五～六丁目
調査期間：平成 19 年 3 月～ 10 月
調査面積：5,400 ㎡

千駄ヶ谷大谷戸遺跡は、新宿御苑と都立新宿高校の間に環状５号線を通す事業に伴って調査された、縄文時代・江戸時代の複合遺跡です。

江戸時代の遺跡地は、江戸の町の外縁に接する千駄ヶ谷村に位置していましたが、1683 年の『お七火事』などを契機に、この一角にも幕府に仕える旗本・御家人の屋敷などが設けられ、町域の拡大が進みました。出土した遺物も江戸時代中～後期のものが主体で、これらの屋敷に関係することを物語っています。今回は、この調査で出土した色絵磁器を御紹介しましょう。

写真の托（碗を置く茶道具）は、非常に薄く精巧な作りで、鍔の裏側には、窯で焼く時に熱で垂れないように支えた細かいハリの痕が列点状に並んでいます。染付で丁寧かつ力強く描かれた唐草の余白には錆釉が施され、これが濃い藍色と明るい黄褐色の対比という鮮やかな色彩を演出しています。

九州陶磁文化館の大橋康二氏によると、これに類似した例は肥前佐賀藩の初代藩主・鍋島勝茂のものとされる二組の碗・台のみで、大変貴重な資料です。伝世資料の来歴により、1640 年代から勝茂の没した 1657 年頃までに岩谷川内の「御道具山」で焼かれた色絵創始期の製品と推定され、佐賀藩御用で焼かれた最上級磁器「鍋島様式」の成立を考える上でも重要です。

また、この器の出土地点が大御番組という下級武士の組屋敷内にあたることから、新たな謎も投げかけられました。なぜなら、こうしたやきものは、大名などへの贈答に用いられるのが主で、通常であれば、このような身分のものは目にすることすらむずかしいと考えられるからです。その答えを今すぐに見出すことはできませんが、これを手掛かりとして、武家社会の様子やそこで用いられたやきものの意味に、新たな光を照らすことができるかもしれません。

この他、三千石の旗本・岡野大学頭屋敷部分からは、一般の食器に混じって、江戸時代後期の煎茶道具や上手の食器などが検出され、この頃に流行した中国趣味・文人趣味の様子が窺えます。明治時代の遺構からは、近隣の代々木練兵場で日本初飛行に成功した複葉機の描かれた茶碗なども出土しています。

これらの資料は、当センターにて７月頃まで展示しています。機会がありましたら、是非ご覧下さい。

（川田 壽文・長佐古 真也）

参考文献：大橋康二 2000「鍋島家伝来の色絵磁器について」『東洋陶磁』第 29 号

今ではすっかり様子が変わって道路と住宅になっていますが、1986年頃まではJR南武線の南多摩駅をおりると正面に「城山」と呼ばれた小高い山が見えていました。ここが、多摩ニュータウン遺跡群の№513遺跡でした。

遺跡遠景（南西から）

遺跡の調査は、1982年の夏に開始されました。昔から、この城山には名前の通り中世の城が築かれていたことが『新編武蔵風土記稿』の記載などで知られており、また西側の山裾では、1981年の道路拡張工事で武蔵国分寺跡から出土する、八葉蓮華文と同じ模様の瓦が多量に出土したため、尾根頂上部に瓦葺の建物か、瓦を焼いた窯の存在が予想されていました。

1／964

多摩ニュータウン№513遺跡

調査が進み、頂上部には番小屋か物見の小屋の痕跡が残る5m程の平場（主廓）と、それを囲む濠、さらにその外側には土手状の曲輪、南の尾根筋には狭い平場（搦手）など、城の構造（縄張り）が確認されました。他にも古墳時代の横穴墓、古代の住居跡、古代末期からの末法思想の影響による経塚、火葬骨を納めた壷、中世の板碑群などが発見され、主に精神生活を支える宗教的な場所として利用された遺跡であることが判明しました。しかし、どこにも瓦葺建物の痕跡は発見されませんでした。

窯跡の分布（写真上方が北）

そんな時、東側斜面で窯跡の煙突部分が見つかり、瓦を焼いた窯跡の存在が明らかになりました。そこで窯跡がどれくらい存在するのか、電波探査など様々な手法を駆使し、十数箇所の分布を確認することができました。

安全対策工事のため、一年間中断後の1985年の春、斜面部分を中心として再開された調査の結果、斜面ごとにその構造や生産品が異なっている窯跡群であることが判明しました。それは、西側斜面が国家的事業として建立された武蔵国分寺創建期の瓦を生産した一群、北側斜面では、国分寺建立に協力した有力者に対して使用が許されたとされる瓦を生産した一群、供給先はいまだに謎のままですが、国分寺よりも古い時期の瓦と須恵器を生産した一群の3群15基の窯跡が調査され、国分寺創建期前後の様子が分る貴重な遺跡となりました。

この後、多摩ニュータウン遺跡群からは7世紀の須恵器窯や、同じく国分寺瓦窯などが相次いで発見されますが、№513遺跡で発見された多彩な遺構・遺物の重要性から1999年には東京都指定有形文化財（考古資料）に指定されています。発掘調査の報告書は東京都埋蔵文化財センター調査報告第3集と5集として刊行されています。　（竹花 宏之）

西側斜面出土
八葉蓮華文鐙瓦（上）
三重弧文字瓦（下）

北側斜面出土
剣先状八葉蓮華文鐙瓦（上）
均整唐草文字瓦（下）

東側斜面出土
四重弧文字瓦

石器の「ツボ」　Vol. 2

槍先形尖頭器（やりさきがたせんとうき）

旧石器時代と縄文時代の石器の観察のツボを紹介する連載の第２回。毎回ひとつずつ石器を紹介していきます。今回は槍先形尖頭器です。

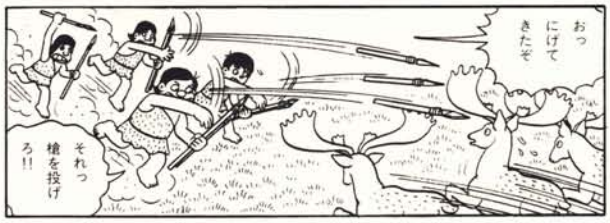
槍先形尖頭器とは、旧石器時代の石の槍先のことです。約１万８千年前、日本列島に暮らしていた旧石器時代の人々は、木の実や動物の肉などを食べていました。しかし、肉を食べるには、狩りをしなければなりません。狩りではシカやイノシシを獲っていたと考えられます。シカの場合は、仲間たちと山に分け入り、群れをなしているシカを見つけ、谷の中などへ群れが逃げないように遠巻きにして追い込むと考えられます。そして、追い詰めたシカの近くからとどめを刺すのですが、その「とどめ」に槍を使うのです。

槍は、石でできた槍先と、手に持つ木の柄からなり、槍先と柄を樹脂（じゅし）で固めるなどして動かないようにします。その先端の槍先が、槍先形尖頭器です。

槍先形尖頭器は、こぶしほどの大きさの石をシカの角ややわらかい石のハンマーで打ち欠いて作ります。細かな加工を丁寧にほどこし、尖った形に仕上げます。この作業は、器用で熟練していなければできません。博物館（はくぶつかん）で槍先形尖頭器が展示されていたら、先端や周りの細かなギザギザした打ち欠いた跡を観察してください。大変細かく丁寧で、旧石器人の手先の器用なことがわかります。

槍先形尖頭器の「ツボ」：

槍先形尖頭器は狩りに使う槍先です。細かな打ち欠いた跡を観察して、石器作りの細やかさを知りましょう。　（伊藤）



槍先形尖頭器の使い方
（オオツノシカを追い詰めて投げる）

槍先形尖頭器の作り方
（シカの骨のハンマーなどを使って打ちかく）

イラスト：『まんが大和の歴史　第１巻　先土器時代』発行：大和市教育委員会、マンガ：横田とくお より転載

くろがね物語　十六

古代刀の考古学（上）

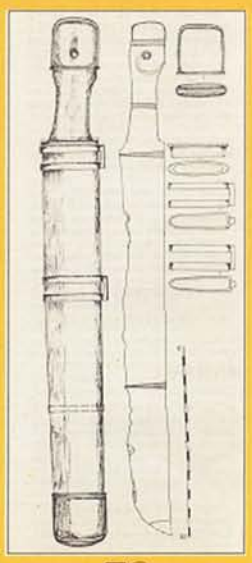
日本列島においては、鉄（鋼）を用いた刀は弥生時代中期以降に出現します。3世紀後半には、畿内に強大な権力（大和王権）が誕生し、大陸や半島からの鉄原料を利用した本格的な刀の生産が開始されました。とくに古墳時代後期に相当する6・7世紀には、環頭大刀や頭椎大刀などの特徴的な大刀が流行します。この時期の大刀は金・銀装の柄頭を有することから、「装飾付大刀」とも呼ばれています。また、大刀には本来身分や地位を表現する役割があると考えられ、大刀の所有者が中央の身分秩序に組み込まれた可能性が指摘されています。

奈良時代には、古墳時代以来の方頭大刀の系譜を有する「黒作大刀」（写真①）等が盛行します。刀の鞘や柄頭などの拵えに鉄や黒漆を用いることから、この名が付けられたものですが、代表的なものが奈良正倉院に伝わっています。同じ様式でやや短身の「黒作横刀」もありますが、これは身幅の広い刃部をもつ刀です。これらの刀には、鞘に双脚足金物という腰に下げるための装具がつけられ、柄頭には筒形や方形覆輪式の金具が用いられています。黒作大刀は当時の兵制において、兵仗大刀として採用されていました。

ところで、正倉院には未使用の刀身である無荘刀（写真②）も収蔵されています。実は、これと同じ型式の横刀（図①）が長野県茅野市の一墳墓からも出土していて、畿内と地方との刀鍛冶技術の密接な交流を物語っています。同時に、黒作刀が東国でも製作されていた可能性を示唆する重要な手掛かりといえます。（松崎）

写真①

写真②



図①

（『正倉院の刀剣』正倉院事務所 1974 年他より転載）

保存科学室だより　7

—火災被災出土品の修復　その2—

今回からは修復の手順について紹介しましょう。

まず、被災出土品（今回は、主に古代の瓦）の外面に付着した樹脂汚れを取り除きます。遺物収納用コンテナの素材であるポリプロピレン樹脂は、200℃前後の比較的低い温度で軟化・溶融しますので、主にヒーティングガンと呼ばれるドライヤーに似た高温風を出す機器で暖めながら、はずしたり、拭き取ったりします。被災程度にもよりますが、1点あたり10分～1時間ほどで取り除くことができます。

実際には、ポリプロピレン以外の樹脂が付着していたり、他の汚れと複合しているため、経験と勘を働かせながら、また常に工夫や改良を加えながらの作業となります。作業者の安全にも配慮し、樹脂から揮発したガスを吸引するのを防ぐための局所排気装置を自作しました。

また、火傷防止のために厚手の革手袋も着用します。

（長佐古）

局所排気装置とヒーティングガン

拭き取り作業の様子

2009年度　広報・普及事業のご案内

（一般は中学生以上）

行事名	対象/人数	日	時	備考
文化財講演会	一般120名	第1回 7/15(水) 第2回 9/12(土) 第3回 10/21(水) 第4回 10/22(木) 第5回 11/18(水)	13:30～15:30	当日受付
文化財特別講演会	一般120名	第1回 6/20(土) 第2回 12/16(水) 第3回 1/20(水) 第4回 2/20(土) 第5回 3/10(水)	13:30～15:30	当日受付
発掘調査発表会	一般120名	3/22(祝)	13:00～16:00	当日受付
展示説明会	参加自由	4/4(土)	午前の部10:00～ 午後の部13:30～	当日受付　1時間程度
縄文土器作り教室	①④一般30名 ②③親子15組 （小学4年以上）	制作　① 5/9・10(土・日) ② 7/18(土) ③ 8/1(土) ④ 9/26・27(土・日) 野焼き① 6/6(土) ②③共 8/20(木) ④ 10/17(土)	制　作 9:30～ 16:00 野焼き 9:30～ 15:30	往復はがきで申込み ①締切:4/23(木) ②③締切:6/25(木) ④締切:9/16(水)
縄文アクセサリー作り教室	①⑥⑦ 一般30名 ②～⑤⑧⑨ 親子15組	① 5/30(土)午前 ② 7/29(水)午前 ③ 7/29(水)午後 ④ 8/22(土)午前 ⑤ 8/22(土)午後 ⑥10/24(土)午前 ⑦ 1/30(土)午前 ⑧ 3/27(土)午前 ⑨ 3/27(土)午後	午前 9:30～11:30 午後 13:30～15:30	往復はがきで申込み ①締切:5/18(月) ②③締切:7/16(木) ④⑤締切:8/6(木) ⑥締切:10/15(木) ⑦締切:1/18(月) ⑧⑨締切:3/16(火)
古代の布作り教室	①④一般30名 ②③親子15組	①5/30(土)午後 ②7/25(土)午前 ③7/25(土)午後 ④11/28(土)午前	午前 9:30～11:30 午後 13:30～15:30	往復はがきで申込み ①締切:5/18(月) ②③締切:7/16(木) ④締切:11/17(火)
貝輪作り教室	30名	6/27(土)	9:30～11:30	往復はがきで申込み 締切:6/16(火)
考古学実習① ー古代食体験ー	30名	4/29(祝)	10:00～15:00	往復はがきで申込み 締切:4/16(木)
考古学実習② ー火おこし体験ー	一般10名 親子10組	① 8/29(土)午前の部 ② 8/29(土)午後の部	午前の部 9:30～12:00 午後の部 13:30～16:00	往復はがきで申込み 締切:8/20(木)
考古学実習③ ー縄文食体験ー	一般10名 親子10組	① 10/31(土) ② 11/3(祝)	9:30～13:00	往復はがきで申込み 締切:10/15(木)
考古学実習④ ー石の斧で木を切るー	参加自由	11/14(土) 雨天の場合は11/15(日)	10:00～15:00	当日受付
考古学相談室	小・中学生・一般	通年(土日は除く)	10:00～16:00	受付随時

2009年度　企画展示のお知らせ

多摩丘陵に位置する多摩ニュータウン地域の中で、数多くの縄文集落が発見され、調査されてきました。中でも大規模な集落として著名な多摩ニュータウンNo.72遺跡を中心として取り上げ、遺跡の性格の説明を加えながら、各遺跡から出土した特色のある遺物をそれぞれ紹介した展示を行いました。

展示ホール中央にNo.72遺跡から出土した縄文土器を縄文時代中期の時期ごとに展示し、文様構成の比較が一目で分かりやすく展示しています。

【表紙の写真】

～ 文京区 春日二丁目西遺跡 ～

江戸時代の初めに屋敷地を造成するために谷を埋めた跡です。

表土直下に江戸時代の遺構面が2面あり、埋められた谷の下から中世の遺構が見つかっています。

たまのよこやま 76　　2009年 3月 31日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　http://www.tef.or.jp/maibun/